

ロシアSF瓦版 「かぜのたより」 第1号

◇ワールドコン横浜で開催さる

去る8月30日から9月3日にかけてパシフィコ横浜で開催されたワールドコン「N i p p o n 2 0 0 7」に筆者も参加した。実は直前まで参加予定ではなかったのだが、8月31日の「ヲタクエクスプレス 東京発モスクワ行き」というプログラムに沼野充義、大野典宏、司会の高野史緒の各氏とともにパネリストとして部屋へ向かったところ、会場には60人あまりの聴衆が詰めかけ、大きな関心を感じさせた。

沼野氏や筆者のオタク度はさほど高くはないため、オタク談義は大野氏が愛と熱をこめて展開し、会場を沸かせた。なかでも、インターネットが普及する以前の90年代初頭のF I D Oを使ったロシアのファンダム活動の詳細については、いわば歴史的な生き証人とも言える大野氏の独壇場となったが、筆者も技術的な側面はまったく知らなかったため、非常に参考となった。詳細を文章にするのは若干のためらいがあるが、ひとつ言えるのは、ロシアのオタク事情はもはや取り返しのつかないところにまで進行してしまっており、不可逆的な決定的変化が起きてしまったということである。

◇ロシアの新しいビジュアル系専門誌

ところで、ロシアからはモスクワのSF情報誌「ミール・ファンタスチキ」«Мир фантастики»の編集長であるニコライ・ペガソフ（1977年生）と同誌編集部のパョートル・チュレネフ（1983年生）のふたりが参加しており、帰国後、筆者に10月号を送ってくれた。

「ミール・ファンタスチキ」誌は「イエースリ」や「真昼の二十一世紀」、「レアリノスチ・ファンタスチキ」といった小説中心の専門誌とは異なり、2003年に創刊されたヴィジュアル化の進んだ雑誌である。「ターミネーター2」のDVDの付録があったが、購読案内を読むと、DVDなしでも定期購読は可能なようである。発行部数は35500部に達しているようだ。

誌面192頁のうち、30頁強を映画やアニメの記事が占めており、ベストセラー作家ワシーレイ・ゴロワチョフ原作の映画«Смерш- X X I»の製作の様相などが紹介されている。

「アニメにおける宇宙SF」を紹介した記事では、「宇宙戦艦ヤマト」や「キャプテン・ハーロック」、「銀河鉄道999」からガンダム、マクロス、「コブラ」、「星界の紋章」、「ほしのこえ」などの作品について概観されている。

このほかにゲーム関係の記事が30頁弱、イラスト関係の記事も30頁弱あり、書評等の小説関係の記事は50頁ほど、創作に関してはセルゲイ・チェクマエフの掌編が目につく程度である。

このように書いていると小説の比重が少ないように思われるが、レオニード・カガーノフやアレクセイ・ベッソノフ、ポール・ディ・フィリポといったいわゆるSFのなかの主流作品の書評は、サンクト・ペテルブルグのSFファンであり、歯切れのいい書評で知られるワシーレイ・ウラジーミルスキイが執筆している。このほかにウラジーミル・プジイ、ドミートリイ・ズロトニツキイといった人の名が目立つ。また、実力のあるSF作家のオレグ・ディヴォフが

SF賞の解説記事を書いているなど、アニメや映像から入ってきたSFファンを小説のファンにつなげようとする意図が強く感じられる構成となっている。

しかし、こうした構成をとっているのは「ミール・ファンタスチキ」誌ばかりではない。2006年に創刊されたサンクト・ペテルブルグのSF情報誌「ファンタスチカ」«ФАНТастика»もやはり、ビジュアル面に中心を置き、アニメ、ゲームに多くの誌面を割いている。発行部数は10000部とされている。120頁強の誌面のうち、書籍関係を占めるのは50頁弱だが、書評欄の評者を見てみると、ウラジーミル・プジイ、ドミートリイ・ズロトニツキイ……「ミール・ファンタスチキ」誌と同じやんげ！そして、編集部にはワシーリイ・ウラジーミルスキイの名が……雑誌の誌面構成はほとんど変わらないのだが、ここまで来ると、内容まで重なる部分があるのではないかと思ってしまう。

しかも、「ファンタスチカ」誌をよく読むと、書評で取り上げられる本にアズブーカ・クラシカやアムフォラというサンクト・ペテルブルグの出版社から刊行されたものがやけに多い。このことから「ファンタスチカ」誌がローカルな地盤に支えられていることが知れよう。ウラジーミルスキイはアズブーカ・クラシカ社の編集者でもあり、「ファンタスチカ」誌はいわば自社広告といった性格も強いと考えられる。

だが、本が洪水のようにあふれる現代ロシアの出版市場のなかで、刊行された書籍が本来届くべき読者の手に届くように努めることは、むしろ倫理的な態度であるとも言えるのではないだろうか。放っておけば埋もれてしまう本たちである。それを放置

するのは一ファンから出発した出版関係者の正しい態度とも思われぬ。洪水のなかにも飢餓はある。ここで紹介したふたつのSF情報誌のオタク度は相当高い水準に達しているが、愛は飢餓と裏腹のものであると言えよう。

◇編集後記

巷にあふれる情報には、意義が長く続くものもあれば、そのとき、その場でないと意味がないというものもあり、なにが後の糧となるかはわからないけれど、知らなければ単にそれでおしまいということはたくさんある。

ロシアのSFについての情報も、日本語で目にする機会こそ少ないが、ロシアでは氾濫しすぎてなにがどうなっているのかわからないほどだ。氾濫しているのは情報ばかりではない。書籍などの作品自体が氾濫している。そのなかで作品等の受け取り手は本当に求めているものをどのように手に入れ、どうすれば十全に楽しむことができるのか。そして、自分が本当に求めているものは何なのか。それをどのようにして誰に伝えるのか。こうした問いが突きつけられている。だが、こうしたロシアの状況は、日本の自分たちの状況と全く同じものであろう。

同じ時代を共有する者として、あふれる情報に無秩序にさらに情報を重ねるのではなく、届くべき人のもとへ届くべき情報を届けることがいまによりも切実に必要なのだと感じられる。

というわけで、瓦版の創刊です。なんじゃこりゃと言わず、どうぞよろしくお願ひします。

ロシアSF瓦版:かぜのたより

第1号 2007年10月30日発行

編集人 宮風耕治

e-Mail k-veter@dream.ocn.ne.jp